

母の感化

ひ さ こ 子

「母の思は空にみちゆくへも知らずはてもなし」とか、實に母が子を思ふ至情は一分一秒もたえまなくかはりなく限りなく、子に注がれて居ります。「子を思ふほど親を思はぬ」とは申しますけれども、特別に悪い人を除いては、子が母を思ふ至情も是亦筆や口につくされぬほどのもので、つまり母子の愛情は、とても言つたり書いたりして表はす事のできぬほど、深く厚く限りなきものでございます。之は昔も今も何地でも何人でも、かはりのない知れきつた事でございますが、私は今日ひとつ此相互の愛情の泉から流れ出づる感化、殊に母が子に及ぼす感化といふ事に付て少し書きたるのであります。

母の温かい心から流れ出て子に注がる、愛情、實に限りも知られぬ愛情、其ものは母が子に對して何をして居らずとも、子に向て何を言つて居らずとも無論子に通じて居るので、從て子は絶えず實に一分一秒のたえまもなく、母の感化を受けて居ります。是れ相互の愛と感化といふ事はどうしても離れられぬものであるからなので、そうして母の感化は即ち子の品性となつて現はれます。古から賢母と仰がれて居る孟母、正行の母などは、勿論良い例でございますが、現在今日生存して居る人達否人毎に「此母にして此子あり」といふ事が善い側からも悪い側からも現はれて居るので、又遠い昔や遠い處や他人を考ふるまでもなく、第一着に自分の事を考へて見ても、母の感化といふかな例が示されて居りますので、ましてまはりの

人々を見れば見るほど、たれもく〜此例證であるといふ事は、誰方も御感しになる事であらうと存じます。誠に生きと生ける人間一人として母の感化を受けぬものはございませぬ。萬一母に肯ぬ子がありましたならば、それが特別なので母が無限の感化を子に與ふるといふ事は自然でございませぬ。

母の愛情感化は時々刻々に及びますから、知らず〜其温情はチャンと子に印し其感化は深く染みこんで、たとひ母の身体は死しても其心は子の心の中に生きて居つて、子の心、言、行を支配します。あゝ母の責任、之を重しと申しませうか。大なりと申しませうか。私は申す詞を知りませぬ。

殊に、こういふ時に母はこう言はれたとか、あ

の時にはあゝなすつたとか、あゝして下すつたとかいふ事が、特別に記憶に残つて、それがどうしても忘れられぬといふやうな事は、何人にも多いか少いかある事と思ひます。之は母の子に對する一言一句一舉一動には皆愛あり生命が有りますから、深き感動と消えぬ印象を與ふるのでございませう。そうしてそれらは母の感化の強い事に對して容易に説明を與ふる一の材料でございませう。

私は先日、婦女新聞社の女子教育講話會で、巖本善治先生の演説を承りましたが、其時に先生の御話になりました母の感化に付ての例は、並み居る人々に深き感動を與へられました。それは大略次のやうな御話でございませぬ。

私の友人の一人に誠に男子らしい男子であると友人間で評されて居る人がある。其人は非常に

強く母の感化を受けて居るので、「どうしても忘れられぬ事がある」と言つて話す事柄がある。

其人は舊幕時代或小さい藩の貧乏な士の家になつたので、其母は毎日々々一生懸命に機を織つて其織り賃で、僅に、其子の父即ち我夫の好物を調へ、毎夕それを其食膳に上せて、其舌鼓打つて喜ばるゝをば自分の非常の樂喜として居られたといふやうな生計の有様であつた、處が或日當時まだ八九才であつた私の友人が、外で散遊んで腹をへらして駆けこんで歸り、「阿母サン御飯ヲ食ベタイ」と訴へた。をりしも阿母さんは一生懸命に只機を織つて居られて、之に對して何の返辭もせられぬ。あとで分つたが、其時は米が皆無になつて居つたので、之を織り上げて賃を得てから米を買つて來て御飯を炊く

といふ心算であつたので、がしかし自分には何も分らぬから、又もや「阿母サン御飯を食ベタイ」と叫んだ。阿母さんはやはり一言も言はれぬ。セツセと機を織つて居らるゝ、自分は何かなしにやかましく「早く食ベタイ」といふ事を訴へてやまぬ。阿母さんは堪らなくなつたと見えてとうとう機から下りて、自分を紐で脊に負ひ又機を織りはじめた。此間全く無言なので自分は脊の上で何だか淋しくてシヨゲて居ると阿母さんはポロ／＼と涙をこぼして居らるゝ。そうして糸の上に露をなじた涙を拂ては又セツセ／＼と織つて居らるゝ、さてとうとう獨語を言はれた。「ア、一度ヤ二度御飲ヲ食ベナクトモヨイト言フヤウナ男ノ子ガホシイ」と、之を聽いた自分は實にたまらなくなつて「ア、ホント

ウニ一度ヤ二度御飲ヲ食ベナクトモヨイ」と思つてしまつた。此時の心持は今に忘れられぬ。もう一はこうである。自家の近所に極性質の悪い一人の青年があつて、阿母さんは何時でも、「決シテ此兒ト遊ブナ」と戒めて居られた。處が或日のこと、其青年が「チョット」と自分を誘ひに來た。何心なく行くと「一緒ニ來テ呉レ」と言ふ。ついで行くと神社の鳥居の前まで來て「此處ニ待ツテ居ツテ呉レ人が來タラ知ラセルノダゾ」と頼んで獨りではいつてしまつた。少時ボンヤリ待つて居ると、やがて錢を持つて出て來た。(之は竹のさきに繻をつけて賽錢箱の中のを盗み出して來たので) そうして番をして居つた事の禮を言つて、「之カラ此御金デ御禮ヲスルカラ」と言つてつれて行く、さて町に行くと

大きな羊羹を二本買つて、「サーのヲ食ヒタマヘ」と一本を呉れた。たまに一切か二切他家で貰て食べる時に、「ドーモオイシイモノデアル一ペツドツサリ食ベテ見タイ」と望んで居つた羊羹を目前に出されたのであるからたまらない。喜びで早速食ベようとした一刹那思ひ出した。それはかねて阿母さんから此青年と遊ぶなと言はれて居つた其戒が不圖心に浮んだので、サーそうなるると其悪い兒から貰つたものを、阿母さんにだまつて食べるのは何だか悪いやうな氣がして一目散に駈け出して歸つた。いつもより歸りが遅いので心配して居つた阿母さんは喜んで迎へて「マー何處ニ行ツテ居ツタ」と言ひ「自分の手に持つ羊羹を見る。「コー」デ食ベズニ持つテ歸ツタ」と話した處が、サー其時の母の

喜と言つたら形容のしかたもない位で、實に縁側で雀躍をして喜ばれるので「マーヨク食べズニ歸ツタソレヲ一口デモ食べタラバモ一武士ニハナレナイ處アツタ」とそれは〜非常に喜ばれる。羊羹を持つたまゝ、庭に立つて居た自分は呆氣にとられる。さて阿母さんはすぐ自分を連れて裏の方にある川の傍に行き、自分の手にして居つた羊羹を取るより早く、ポーンと何處まで行くか雲の中にもはいつたかと思ふほど力かぎり遠くに投げ出してしまつた。手の内の玉をとられたやうな自分はワツと泣き出した。母は「之ヲ食べナカッタノハ誠ニヨイ其代リニ今日ハ汝ノ好キナ物ヲドツサリ上ゲル」と言つて歸つてから麥ころがしを澤山食べさせて呉れた。

之が忘れられぬ一の事柄なので、其後世の荒波の中に立つて誘惑に勝ち艱難に堪へた時毎に、母が雀躍して喜んで呉れるやうな氣がして、其様が目にちらつく。

わ、此阿母様の心は今もなほ此方の心の中に働いて居らるのでございませう。女子教育が今ほどに盛でなかつた舊幕時代に、之ほどの美はしい精神的感化を其子に及ぼした例は少くないと思ひますが、明治の阿母様は之に省みて、其子の精神教育といふ點に於て果して遜色なしと申されませうか。

ア、母の感化！
 ねそるべく尊ぶべきは母の感化！！